明治期の兵語辞書について　(二)

—— ドイツ語を中心にして ——

信　岡　資　生

2　改正兵語辭書　獨和對譯之部　第一

1

国会図書館収蔵のものは黒と黄のモザイク模様のついた厚紙表紙の薄い本で、本文の大きさは縦22,4cm×横15,1cm　である。扉には次のように書かれている（**図1**）。

明治廿二年五月十日出版
改正兵語辭書　獨和對譯之部　第一
版權所有　　參謀本部

扉裏は白、次に以下の改正兵語辭書引が2頁にわたって続く（**図2**）。

改正兵語辭書引
兵學ノ駸々其歩ヲ進ムルヤ日一日ヨリ甚シ學者ノ長ヲ歐洲ニ取ル益〻勉メサルヘカラス而シテ譯語ノ紛々一定セサル以テ學術ノ基本ヲ立ツ可カラス其害輕キニ非ス本衙夙ニ之ヲ憂ヒ陸軍省四等出仕西周等ニ命シ五國對照兵語字書ヲ撰ハシメ明治八年三月ニ昉リ十二年十月ニ至テ竣ル然リト雖モ爾來數〻裘葛ヲ換ヘ時勢變遷新器新語ノ出ル尠カラス其書已ニ行ハレ難キニ至レリ是ニ於テ昨年一月改訂ノ命アリ而シテ今日用ヒント欲スル所ノ者亦必ス諸學校諸官廨ノ實際ニ適スルヲ要ス乃チ日

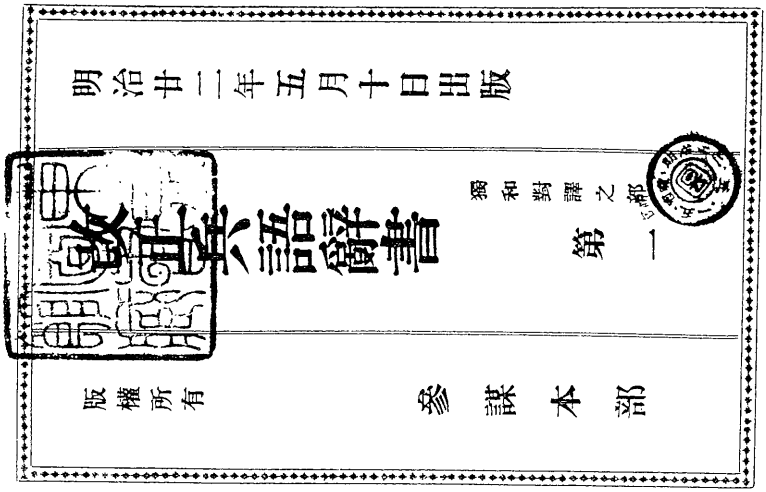

図1

図2

常最モ多ク兵語ヲ譯述スル校廨ノ各兵科將校中ニ就テ審査委員ヲ撰任シ其ノ精ニシテ泛ナラサルヲ要スルヤ先ッ佛獨二國ニ止メ其ノ需用ニ急ナルヤ復々全部ノ卒業ヲ竢タス一二篇成ル毎ニ直チニ之ヲ印刷ニ付ス余乏ヲ委員長ニ承ク乃チ印刷ノ始ニ臨ミ其事由ヲ引スル此ノ如シ

明治二十一年十一月

陸軍參謀本部長男爵小澤武雄識

引　注

裘葛（きゅうかつ）を換う：一年の月日がたつ；裘葛とは，冬に着る皮の衣と，夏に着る葛（くず）の繊維で織った衣；冬服と夏服

官廨（かんかい）：役所，官庁；後出の校廨とは学校や官庁

泛（はん）：汎；あまねく，ひろく，広範にわたる

竢（ま）つ：待つ

余乏：自己を謙遜しての表現

扉に欧文題名はない。

次いで辞書の審査委員の委員長と幹事の名前が

改正兵語辭書審査委員長	參謀本部次長陸軍中將	小澤武雄
同　幹事	陸軍大學校教授陸軍歩兵中佐	大島貞恭
	陸軍大臣秘書官 兼戸山學校次長　陸軍歩兵中佐	寺内正毅
	參謀本部陸軍部第一局第二課長 兼陸軍大學校教授陸軍歩兵少佐	小坂千尋

と掲げられ、以下委員として，參謀本部陸軍部測量局三角測量課長　陸軍工兵少佐　田坂虎之助，參謀本部陸軍部第二局課員兼陸軍大學校教授砲兵會議々員　陸軍砲兵少佐　中村雄次郎，士官學校兵學教官　陸軍歩兵少佐池田正介，近衛監督部糧食課長兼陸軍軍吏學舎教官　陸軍騎兵大尉　廣虎一，參謀本部陸軍部第二局課員　陸軍騎兵大尉　大藏平三，陸軍大學校

教授心得兼士官學校教官　陸軍工兵大尉　小國　磐，陸軍大學校教授心得陸軍歩兵大尉　木越安綱，士官學校教官　陸軍砲兵大尉　秋元盛之，戸山學校教官　陸軍歩兵大尉　山崎峯次郎，陸軍大學校教授　陸軍砲兵大尉　井口省吾，工兵會議附兼東京鎮臺附　陸軍工兵大尉　渡邊和雄，砲兵局副課員　陸軍砲兵中尉　御影池友邦，會計局副課員兼陸軍軍吏學舎教官　陸軍二等軍吏　遠藤槙司の13名が書き連ねられるが，すべて陸軍のエリート士官であり，海軍軍人はいない。大島（ドイツ），寺内（フランス），小坂（フランス），木越（ドイツ），井口（ドイツ），遠藤（ドイツ）らは既に欧州留学を経験しており，なかでも小坂はサンシール士官学校に学んでいて日本人で外国の兵学校卒業者の嚆矢をなしていた。後に少将まで昇進した大島は陸軍大学で教科書として使われたドイツ陸軍卿シュレンドルフ原著　メッケル補訂『參謀服務要領』（1884）の訳者でもある。彼等はその後日本陸軍の中枢部にあって活躍，寺内は陸軍大臣（明治35年），朝鮮総督（明治43年）を歴任して大正5年には元帥の称号を授けられて官僚内閣を組織し，同7年にはシベリア出兵を強行する。中将に昇進した木越も第三次桂内閣の陸軍大臣となる（大正元年）。井口は大将に昇進，陸軍大学校長から朝鮮駐剳軍司令官となる。小澤は中将に進んで陸軍士官学校長から参謀本部長も務める。大藏も中将に昇進，同じく中将になった中村は大正3年南満州鉄道株式会社の総裁から同6年には関東府都督となる。田坂，池田は少将に昇進，小国は砲工学校長，廣は近衛師団監督部長で日清戦争では第五師団監督部長，陸軍士官学校第一期卒業生だった秋元は大佐に進んで函館要塞司令官となる。小坂は陸軍大学校の第一期卒業生でしかも一番だったというが，中佐で病死。遠藤は予備役となってから和歌山県知事となる。寺内（子爵），小澤，中村，大蔵，木越（男爵）は勲功により華族に列せられている[1)]。

その後に「改正兵語辭書譯輯」として

參謀本部陸軍部編纂課附陸軍屬　　若藤宗則

參謀本部陸軍部雇編纂課出勤
非職陸軍省七等出仕　　松見斧次郎

の2名が掲げられ，最後に

此他軍律ニ關スルノ語ハ之ヲ陸軍省ニ移シ總務局人事課ニ於テ審査ス

となっている。陸軍省參謀本部挙げての編纂であったことがわかる。

2名の譯輯者のうち，若藤宗則は『五國對照兵語字書』の序にも名前を列ねていて，先に『明治期の兵語辞書について　㈠』で既述した。

この辭書の編纂の趣旨は，この「引」（はしがき）によると，先に『五國對照兵語字書』を作成してほぼ十年も経つと，時勢の変化・新語の増大に対応しきれず，辞書の改訂が要望されるのは当然で，とりあえず仏独の2国語に限り，それも全部が完成するのを待たずできたものから分冊の形で順次刊行してゆくというのである。確かに第一に続く『獨和對譯之部　第二』と『佛和對譯之部　第一』は現存するが，その後の巻は現存していない。後述する明治32年11月刊行の藤山治一・高田善次郎合著『獨和兵語辭書』（獨逸語學雑誌社）の序文に，参考文献として挙がっている本邦出版の兵語辞書は

佛獨英蘭和五國對照兵語辭書（明治十三年東京參謀本部編纂）[2)]
改正兵語辭書獨和對譯ノ部第一及第二（明治二十三年東京參謀本部編纂）
獨佛和兵語辭叢[3)]（東京偕行社編纂）

の3点のみである。また明治42年11月刊行の兵藤三郎著『最新獨和兵語辭典』（兵事雑誌社）の緒言に挙げられている「參考セル書籍」の中の「參謀本部編纂改正兵語辭書獨和對譯ノ部」は同様に「第一及第二　二冊」であるところから，刊行された分冊は上述の3篇のみであったと思われる。西堀　昭氏も「改正兵語辞書　仏和対訳ノ部」の解説の中で，「本書は，「五国対照兵語字書」の改訂版として，順次刊行されたものであったが，国立国会図書館には独和ノ部がA・B仏和ノ部のAと計三部ある。他の図書館（大学図書館を含む）にもBあるいはC以降は所蔵されていないと思わ

れるので恐らくB以下は完成しなかったと推定」[4] している。

参考文献の名は挙げられていない。

注

1)『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館　2001年），松下芳男著『日本軍閥興亡史<上>』（㈱芙蓉書房出版　2001年），大植四郎編『明治過去帳　物故人名辞典』（東京美術刊　昭和10年　原著私家版　昭和46年），『大正人名辭典』（㈱日本図書センター　1987　底本五十嵐栄吉編・発行「大正人名辭典」第四版　大正七年　東洋新報社），『明治人名辞典』（㈱日本図書センター　1987　底本古林亀治郎編・発行「現代人名辭典」第二版　大正元年　中央通信社），福川秀樹著『日本陸軍将官辞典』（㈱芙蓉書房出版2001），原　剛・安岡昭男編著『日本陸海軍事典』（株式会社新人物往来社1997）による。なお，特に木越，遠藤の経歴については，上村直己教授の論文『陸軍大学校ドイツ参謀将校の通訳官たち』（熊本大学教養部紀要外国部・外国文学編　第23号　1988　167～184頁）に詳しい。

2) 原文のまま。「…字書」が正しい

3) 書名は正しくは「獨佛和兵語字叢」

4)『軍事史学　第9巻　第2号』（軍事史学会編集　昭和48年9月）所載の「明治時代の兵語辞典の考察」67頁

2

『獨和對譯之部　第一』の本文は，A1―51（52頁目は白紙）と，附録1―22の計74頁から成る（**図3，4**）。1頁35行，頁当りの見出し語数は平均30語とみて，全体で約2100強（本文1500＋附録600）である。見出し語は品詞にかかわらず頭字は大文字でラテン字体の太字，発音や変化形は記されていない。略語表は特に設けられていないが，s. (= sieh) や od. (= oder) などが使われている。訳語の日本語は漢字と片仮名で縦書きされている（本稿では横書きとする）。訳語にはしばしば詳細な補助説明が加えられている。挿図の入った頁もある。最初と最後の見出し語は次の通りである。

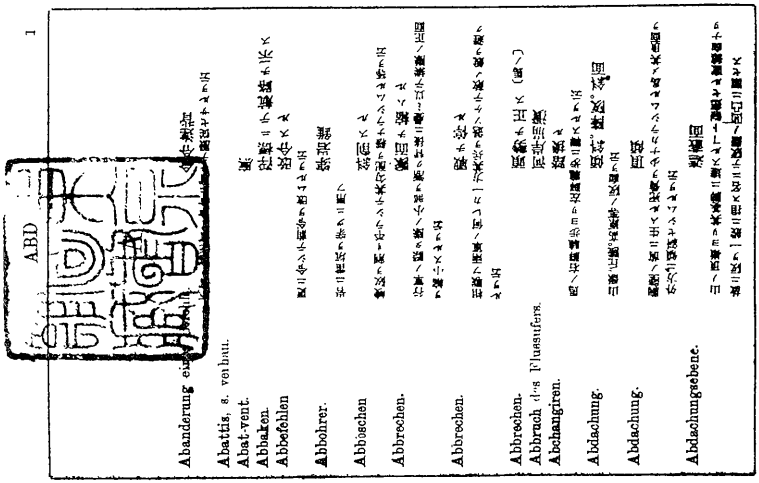
ABD
Abanderung
Abattis, s. verhau.
Abat-vent.
Abbaken.
Abbefehlen
Abbohrer.
Abböschen
Abbrechen.
Abbrechen.
Abbrechen.
Abbruch d-s Flussufers.
Abchangiren.
Abdachung.
Abdachung.
Abdachungsebene.

図3

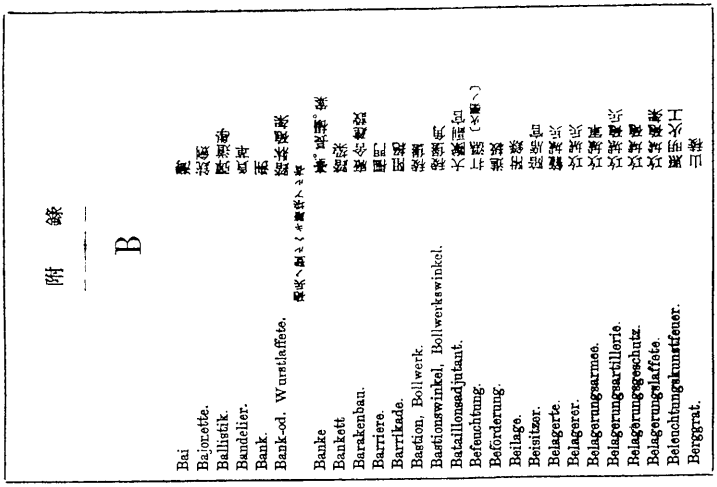
附　錄
B
Bai
Bajonette.
Ballistik.
Bandelier.
Bank.
Bank-od. Wurstlaffete.
Banke
Bankett
Barakenbau.
Barriere.
Barrikade.
Bastion, Bollwerk.
Bastionswinkel, Bollwerkswinkel.
Bataillonsadjutant.
Befeuchtung.
Beförderung.
Beilage.
Beisitzer.
Belagerte.
Belagerer.
Belagerungsarmee.
Belagerungsartillerie.
Belagerungsgeschütz.
Belagerungslaffete.
Beleuchtungskrumtfeuer.
Berggrat.

図4

Abänderung eines Befehls　命令違背

下官ノ者上官ノ命令ニ背キテ服從セサルヲ云

Aziz　英武。大德

亜剌比亜ニテ王候又ハ勇將ニ用フル尊號

附録も本文と同じ組み方であるが，挿図の入った頁はない。ここにはBからZまでの見出し語が収録されている。最初と最後の見出し語は次の通り。

Bai　灣

Zwingermauer　外壁

古式ノ城壁ニ於テ其高壁ノ前ニ繞ラシテ造リタル壁ヲ云

最終頁は奥付になっていて，次のように記されている。

明治廿二年五月四日印刷

發行人兼印刷人　内外兵事新聞局

宇津木信夫

東京々橋區山下町七番地

内外兵事新聞局については，その設置に関して『近代史史料　陸軍省日誌』（第三巻）に，明治九年五月二十七日の次の記録がある[5)]。

參謀局伺

陸軍省日誌從來第一局第五課ニ於テ編集同局ヨリ當局ヘ直ニ照會出版致シ來候處日誌ノ類ハ歐州各國ニ於テモ書肆ヘ申付出版陸軍部内ニ買上候振合之趣ニ候我陸軍ニ於テモ即今兵事新聞局建設相成海陸軍ノ記事致候上ハ該局ヘ右陸軍日誌モ御申付出版候ヘハ官ニテ出版候ヨリハ多少便利ニモ相成殊ニ陸軍部内外共購求ノ儀容易ニ相成兩便ノ利益ト被存候間前件ノ儀ハ

以來兵事新聞局へ御申付相成度此段相伺候也五月二十四日

追テ本文御許可相成候上ハ此迄日誌出版入費ニ相充候金員ハ該局へ御下渡相成候様致度此段申添候也

指令

伺之趣聞届候條兵事新聞局へ可申付尤出版事務ノ儀ハ是迄之通於其局管轄候儀ト可相心得事

即ち「内外」を冠した兵事新聞局は軍の御用機関として置かれたものである。また『日本出版百年史年表』によれば，明治 11 年 10 月に「陸軍卿令で軍人一般に対し《東京日日新聞》《郵便報知新聞》《内外兵事新聞》のほか他の新聞の購買を禁止」との記載がある[6)]。

宇津木信夫については，『明治人名辞典　Ⅱ　下巻』に「君は東京の書籍商なり宇津木書店と称す（所一一三圓餘，營一八圓餘，京橋區山下町七）」と簡単な記述があるのみである[7)]。ただ，大植四郎編『明治過去帳』[8)] に宇津木貞夫という名があり，この人物が京都府士族で元参謀本部八等出仕とあるところから，両人の間に何らかの繋がりがあるとも考えられる。因みに明治 14 年 2 月 12 日の東京書林組合会員名簿 206 名の中には宇津木書店ないし宇津木信夫の名前は見当たらない[9)]。

注

5)『近代史史料　陸軍省日誌』第三巻　朝倉治彦編　東京堂出版　昭和 63 年

6)『日本出版百年史年表』社団法人日本書籍出版協会発行　1968　71 頁

7)『明治人名辞典　Ⅱ　下巻』1988 年 7 月　㈱日本図書センター　底本「日本現今名辞典」（明治三三年）

8)『明治過去帳　物故人名辞典』東京美術刊　昭和 10 年 12 月　原著私家版　昭和 46 年 11 月　新訂初版

9) 彌吉光長著『未刊史料による日本出版文化　第五巻　近代出版文化』株式会社　ゆまに書房　平成二年　572～576 頁

3 改正兵語辭書 獨和對譯之部 第二

国会図書館収蔵のものは，前掲書『第一』と同じく厚紙の表紙（無模様）で補修綴じしてあり，形式体裁も『第一』と同様である。扉も『第一』と同じ形式で，出版日が「明治廿三年四月七日出版」となっている。扉のあとに『第一』と同文の「改正兵語辭書引」並びに「編纂委員會委員名」がそのまま入り，続く本文49頁と附録12頁から成り立っている（**図5—6**）。それぞれの最初と最後の見出し語は以下の通り。

本文 B1 – 49 Baake 標桿
Bythometrie 測深術
附録 1 – 12 Abdämmung 堰提（筆者注：原文のママ）
Zwillichsack 旅嚢

即ち『第一』が主としてA項目の語であったのに続いて，『第二』はB項目である。附録にはさらにA項目の見出しも補充付け足してある。見出し語の総計は約1800語である。

奥付も，明治二十三年四月二日印刷 明治二十三年四月七日出版となっている以外は『第一』と同じである。

4 改正兵語辭書 佛和對譯之部 第一

この書も国会図書館に収蔵されているものは，『獨和對譯之部』と同じ体裁形式で，獨和對譯之部に先行して明治21年12月6日に出版されている。扉のあとに『獨和對譯之部 第一』と同文の「改正兵語辭書引」並びに「編纂委員會委員名」がそのまま入り，続く本文38頁と附録15頁から成り立っている。本文はA項目の見出し語が並び，附録と合わせて収録

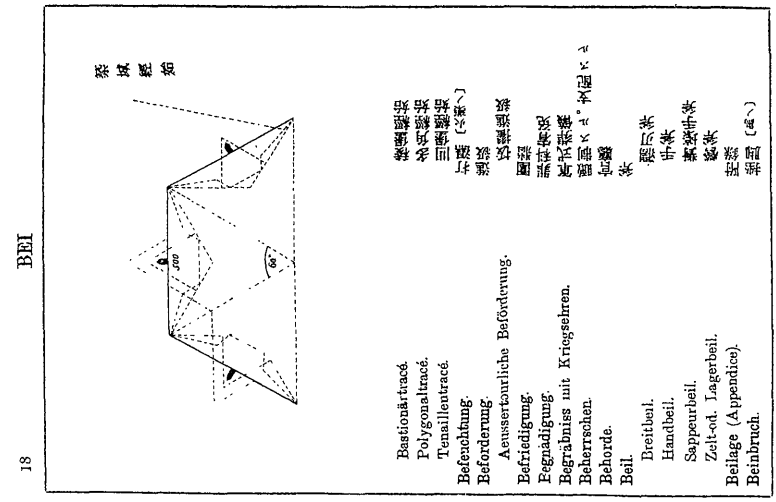
18
BEI
深堀經始
Bastionärtracé.
Polygonaltracé.
Tenailleutracé.
Befeuchtung.
Beförderung.
Aeusserlicher Beförderung.
Befriedigung.
Begnadigung.
Begräbniss mit Kriegsehren.
Beherrschen.
Behörde.
Beil.
Dreibiel.
Handbeil.
Sappeurbeil.
Zelt-od. Lagerbeil.
Beilage (Appendice).
Beinbruch.
BEK
19
Beinharnisch.
Beinleder des Tambours.
Beinschienen.
Beisitzer.
Beissszange.
Beithär.
Beithärlik.
Bekleidung.
Bekleidung.
Bekleidungsfaschine.
Bekleidungsgeld.
Bekleidungskommission.
Bekleidungsmaner.
Bekrönung eines Werkes.
Bekter.

図5　図6

語数は計約 1600 と思われる。本文と附録それぞれの最初と最後の見出し語は以下の通り。

本文　1 – 38	Abaissement de la trajectoire 彈道低度［射線或ハ覷線下ニ］
	Azimut. 地平經度
附録　ノンブルなし	(1) Bache　鑛斗
	(15) Zone d'activite d'une place. 要塞砲逞力地界

『五國對照兵語字書』の訳語と対比してみると，次のようである。

見出し語	『五國對照兵語字書』	『改正兵語辭書　佛和對譯之部第一』
Abaissement	砲肘心低度（膓心ヨリノ）	彈道低度
Abandon	放下（劔ノ）	檀離。委棄
Abatis	鹿角　即逆茂木	鹿柴
Abri	隠處（カクレガ）	蔭蔽。蔽障。翳舍

奥付も『獨和對譯之部』と同じ形式体裁で，日付だけが違って「明治二十一年十二月三日印刷」となっている。

上記西堀　昭氏は以下のように解説している[10)]。

編訳者は参謀本部陸軍部編纂課附陸軍属若藤宗則，同七等出仕松見斧次郎の二人で旧メンバーでは若藤宗則が一人残った。このように補遺を作成することは，辞典にとっては極めて必要なことであるが，実現した例は稀である。これは民間の事業ではなかったからであろう。訳も以前に比べて詳細になって来た。

Abaissement de la trajection (au dessous de la ligne de tir, de la ligne de mire) (art.)

弾道低度〔射線或ハ觀線下ニ〕

―― (des hanches et de la croupe) 低度(équit.)

―― du centre des tourillons (au dessous de l'axe de l'áme) (art.) 砲耳軸低度〔即チ砲耳軸砲腔軸ヨリ下ル距度〕

―― du terre-plein (fort) 墨道堀下〔遮蔽面下ニ〕

―― du tir 弾道低度〔目標に比シテ〕

注

10) 注4) の資料 67~68 頁

5　獨和兵語辭書

1

兵語辞書の独和版として,『改正兵語辭書　獨和對譯之部』に続くものである。国会図書館には明治三十二年十一月三十日発行の初版が,筆者の手元には明治三十四年十二月廿四日発行の第二版があるが,第二版は初版に36頁増補したもので,増補分を除くと初版と同じである。

本文の大きさは,縦18,4cm×横12,4cm(いわゆる四六判よりやや小さめ)で,厚さ約2cmである。扉は見開きになっていて,左側が日本語で,縦に三つに仕切られ,左から　陸軍大學校教官陸軍教授　藤山治一　陸軍大學校教官陸軍教授　高田善次郎　合著‖獨和兵語辭書　第一版‖獨逸語學雑誌社藏版　と記されている。右扉は欧文で DEUTSCH-JAPANISCHES | MILITÄRWÖRTERBUCH. ‖ VERFASST | VON | H. FUJIYAMA UND Z. TAKATA. | Prof. und Lehrer a. d. Kriegsakademie zu Tokio. | ERSTE AUFLAGE. ‖ Tokio, 1899. | VERLAG VON DOITSU-GOGAKU-ZASSHI-SHA. と記されている(**図7-8**)。その裏頁には,中

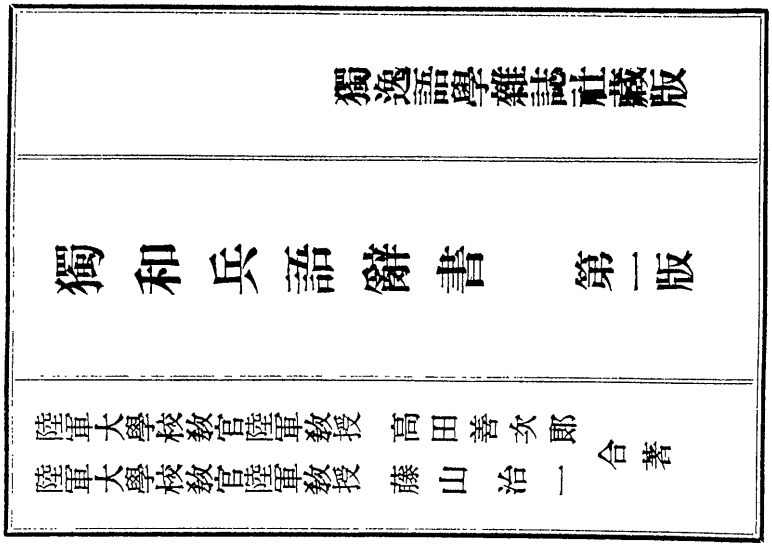

図7

DEUTSCH-JAPANISCHES

MILITÄRWÖRTERBUCH.

VERFASST

VON

H. FUJIYAMA UND Z. TAKATA,

Prof. und Lehrer a. d. Kriegsakademie zu Tokio.

ERSTE AUFLAGE.

Tokio, 1899.

VERLAG VON DOITSU-GOGAKU-ZASSHI-SHA.

図8

勳六等
從六位　藤山治一

明治卅四年十一月東京ニテ

テ頂戴

ダ誤リガアルダロウト思ヒマス、若シアッタラ何卒教ヘノ好意ニ對シ深ク謝セネバナリマセン、此第二版ニモマタカラ之レモ矢張リ第二版ニ載セテアリマス、私ハ同君尉士方久路君ハ態々多クノ新語ヲ私ニ教ヘテ呉レマシ版中ノ誤謬ヲ訂正シテ置キマシタ、私ノ學友陸軍砲兵大ブ所デアリマス、此第二版ニハ數多ノ新語ヲ加ヘ又第一今度本書第二版ヲ出スヿニナリマシタノハ私ノ大ニ喜

図10

第二版ノ序

前記諸氏授業ノ席ニ陪シテ通譯シ或ハ譯官トシテ諸氏ノ參謀旅行ニ隨從ヲ除クノ外十有餘年陸軍大學校ニアリテ獨逸語學教官ノ職ヲ奉シ親シグ予ヤ明治二十年以來從軍期八ケ月獨乙再度ノ漫遊一ケ年（同三十年ニ且リ明治廿九年ヨリ）スルヤ幾何ナラスシテ日清ノ戰役起リ爾後傭聘ノ事止ムニ至レリ

爵ハ我軍ノ招聘セル普國將校ノ最後者ニシテ明治廿七年ニ至リ男爵「ブオン、ヴヰルデンブルヒ」大佐及男爵「ブオン、グルートシュライベル」大佐トス、男ルヘシ將軍ノ後ヲ嗣キテ我國ニ來レルハ「ブオン、ブランケンブルヒ」大佐、故我軍ヲシテ今日ノ進歩ヲ得セシメタル蓋シ我軍人ノ永ク忘却セサル所ナ問ノ職ヲ奉シ居ル丁四年其間軍制ヲ改革シ兵棋及參謀旅行ヲ齎ラシ以テ年普國參謀少佐ノ官ニアリテ我國ニ招聘セラレ陸軍大學校教官及軍事顧我軍ノ獨逸兵學ノ思想ヲ得タルハ「メッケル」將軍ノ功トナス將軍ハ明治十六

序

図9

央にドイツ語で版権所有　Alle Rechte vorbehalten とある。次頁から以下の序文が4頁，第二版では更に二版の序文が1頁続く（**図9**）。

序

我軍ノ獨逸兵學ノ思想ヲ得タルハ「メッケル」將軍ノ功トナス將軍ハ明治十六年普國參謀少佐ノ官ニアリテ我國ニ招聘セラレ陸軍大學校教官及軍事顧問ノ職ヲ奉シ居ル亅四年間軍制ヲ改革シ兵棋及參謀旅行ヲ齎ラシ以テ我軍ヲシテ今日ノ進歩ヲ得セシメタル蓋シ我軍人ノ永ク忘却セサル所ナルヘシ將軍ノ後ヲ嗣キテ我國ニ來レルハ「フォン，ブランケンブルヒ」大佐，故「フォン，ウヰルデンブルッヒ」大佐及男爵「フォン，グルートシュライベル」大佐トス，男爵ハ我軍ノ招聘セル普國將校ノ最後者ニシテ明治廿七年ニ至リ男爵歸國スルヤ幾何ナラスシテ日清ノ戰役起リ爾後傭聘ノ事止ムニ至レリ

予ヤ明治二十年以來從軍期八ケ月獨乙再度ノ漫遊一ヶ年（明治廿九年ヨリ同三十年ニ亘リ）ヲ除クノ外十有餘年陸軍大學校ニアリテ獨逸語學教官ノ職ヲ奉シ親シク前記諸氏授業ノ席ニ陪シテ通譯シ或ハ譯官トシテ諸氏ノ參謀旅行ニ隨從シタル亅十四回ノ多キニ達シ加フルニ私暇ヲ得ル毎ニ獨乙兵書ノ反譯ニ從事シタリ是レ予カ聊カ獨乙兵語ニ通スル亅ヲ得タルノ所以ナリ

予ノ獨和兵語辭書ヲ世ニ公ケニセントスルノ志望ハ年既ニ久シ是レ我國從來此類ノ書ニ乏シク二三之レナキニシモアラスト雖モ未タ以テ完全ヲ得タルモノヽ存セサレハナリ然ルニ近年同僚高田氏幸ニ志ヲ予ニ寄セラレ助クルニ編纂ノ事ヲ以テセラレ爰ニ始メテ多年ノ宿望ヲ遂ケ劣カニ小冊子ヲ脱稿スルノ時運ニ會スルヲ得タリ蓋シ其意獨逸兵學ヲ研究スル諸君ノ便ニ供セントスルノ微衷ニ外ナラサルナリ

本書ノ參考ニ供スル書類次ノ如シ

普魯士王國休職大佐「エ，ハルトマン」著陸海軍兵語辭書（千八百九十六年「ライプチヒ」刊行

「ベ，マナッセウヰッチ」著露獨及獨露對譯兵語辭書（伯林「カール，マルコメス」發兌）

佛國參謀本部出仕歩兵第四十一聯隊附大尉「エル，ロアー」著獨佛對譯兵語辭書（千八百九十四年巴里刊行）

普魯士王國退職大尉「アウグスト，ニーマン」著兵語辭書（千八百八十一年「スツットガルト」刊行）

「カール，フォン，アルベルト」著獨英佛對譯工藝辭書（千八百七十七年「ウヰースバーデン」刊行）

佛獨英蘭五國對照兵語辭書（明治十三年東京參謀本部編纂）

改正兵語辭書獨和對譯ノ部第一及第二（明治二十三年東京參謀本部編纂）

獨佛和兵語辭叢[11]（東京偕行社編纂）

本書ノ用語ハ多ク專門家ノ校閲ヲ經タリ就中多ク勞ヲ頒タレタル諸氏ヲ擧クレハ戰術及戰略語ノ一部ニ關シテハ砲工學校教官中佐太田氏獸醫學語ニ就テハ陸軍省在職ノ獸醫監學士岸本氏ニシテ此等諸君ノ懇々此ノ煩勞ナル校閲ニ從事セラレタルハ予ノ感謝シテ措ク能ハサル所ナリ其他本書ノ合著者タル高田氏　孜々本書ノ編纂ニ勉メラレ獨逸語學雜誌發兌者タル東儀氏ハ本書ノ發行ニ鞅掌シ國文社々長ハ出版ノ事ニ盡力セラレタリ是レ亦予ノ深ク謝スル所ナリ

本書編纂ノ目的ハ一ニ軍人諸君ノ便ヲ謀ルニ在ルカ故ニ予ハ深ク諸君ノ此擧ニ賛助セラレンヿヲ望ミ又本書ノ未タ盡サスシテ缺點ノ許多存スヘキモノアルヲ謝ス是茫漠タル範圍ヲ網羅セントスルニハ此ノ如キ小冊子ノ能ク盡シ得ヘキニ非ルヲ以テナリ諸君幸ニ予カ為メニ誤謬缺點ヲ摘發シ毎ニ之ヲ予ニ報道セラレナハ予ハ以テ諸君カ予ヲシテ他日本書ノ完成ヲ期センメントスル厚誼ノ證ト為サン

明治卅二年十月東京ニ於テ　　藤山治一識

序　注

鞅掌（ナウショウ）：忙しく立ち働く

期センメントスル：期セシメントスルの誤りと思える

また，第二版ノ序は下記の通りである（**図 10**）。

今度本書第二版ヲ出ス亅ニナリマシタノハ私ノ大ニ喜ブ所デアリマス，此第二版ニハ數多ノ新語ヲ加ヘ又第一版中ノ誤謬ヲ訂正シテ置キマシタ，私ノ學友陸軍砲兵大尉土方久路君ハ態々多クノ新語ヲ私ニ教ヘテ呉レマシタカラ之レモ矢張リ第二版ニ載セテアリマス，私ハ同君ノ好意ニ對シ深ク謝セネバナリマセン，此第二版ニモマダ誤リガアルダロウト思ヒマス，若シアッタラ何卒教ヘテ頂戴

明治卅四年十一月東京ニテ

従六位勳六等　藤山治一（ハルカズ）

第一版の序文に比べて語調が鄭重で口語体になっているのが目立つ。

日本語の序文に続いて独文の Vorrede が 4 頁ある。

Vorrede

Die japanische Armee verdankt dem General Meckel die Anschauungen der deutschen Militärwissenschaft. Der Genannte kam im Jahre 1885 als Major à la Suite des preussischen Generalstabs nach Japan, wo er 4 Jahre als Lehrer an der Kriegsakademie und als Ratgeber für das Militärwesen thätig war. Sein Name wird bei der japanischen Armee unvergessen bleiben; sie hat ihm zu verdanken, dass sie auf dem heutigen Standpunkt steht. Es war Meckel, der unser Heer reorganisiert und Kriegsspiel und Generalstabsreisen eingeführt hat. Auf Meckel folgten der Oberst v. Blankenburg, der verstorbene Oberst v. Wildenbruch und der Oberst Freiherr v. Grutschreiber. Freiherr v. Grutschreiber war der letzte preussische Offizier, den

wir in unserem Dienste hatten; er verliess Japan im Jahre 1894 kurz vor dem Kriege mit China.

Mit Ausnahme einer Unterbrechung von 8 Monaten, wo ich im Feldzuge in China war, und einer solchen von 1 Jahre (1896/97), wo ich mich zum zweiten Male in Deutschland aufhielt, bin ich seit 1887 als Lehrer der deutschen Sprache an der Kriegsakademie thätig. Ich hatte das Glück während meiner langjährigen Lehrerthätigkeit den oben erwähnten preussischen Offizieren bei Ertheilung ihres Unterrichts als Dolmetscher und Übersetzer beigegeben zu sein und nahm in dieser Funktion auch an 14 Generalstabsreisen Teil. Da ich ausserdem immer mit der Übersetzung deutscher Militärwerke beschäftigt bin, so liegt es nahe, dass ich einigermassen mit den deutschen militärtechnischen Wörtern bekannt wurde.

Ich hatte seit langer Zeit die Absicht, ein deutsch-japanisches Militärwörterbuch zu veröffentlichen, weil derartige Werke bis jetzt noch nicht vorhanden sind — wenigstens keine vollständigen. Diese Absicht führte ich aus, als mein College Herr Takata sich anbot, mit mir zusammen zu arbeiten, und so ist das vorliegende Büchlein entstanden, welches bestimmt ist, denjenigen, welche die deutsche Militärwissenschaft zu treiben wünschen, zur Erleichterung zu dienen.

Folgende Werke sind als Quellen zu diesem Buche benutzt werden:

„Militär-Hand-Wörterbuch für Armee und Marine," von E. Hartmann, königl. preuss. Oberst z. D. (Leipzig 1896).

„Russisch-deutsches und Deutsch-russisches militärisches Wörterbuch," von B. Manassewitsch (Berlin, Verlag von Carl Malcomes).

„Répertoire alphabétique de Termes Militaires Allemands," par R. Roy, Capitaine au 41e Régimént d'Infanterie, Attaché a l'État–Major de l'Armée (Paris, 1894).

„Militär-Handlexikon," von August Niemann, klg. preuss. Hauptmann a. D. (Stuttgart, 1881).

„Technologisches Wörterbuch—Deutsch-Englisch-Französisch," von Carl von Albert, (Wiesbaden, 1877).

„Wörterbuch in fünf Sprachen für Armee und Marine—Französisch—Deutsch—Englisch—Holländisch—Japanisch" (Herausgegeben vom Grossen Generalstabe, Tokio, 1880).

„Neues Militärwörterbuch—Deutsch-Japanisch," I und II. Theil. (Herausgegeben vom Grossen Generalstabe, Tokio, 1890).

„Deutsch—Französisch—Japanisches Militärwörterbuch." (Herausgegeben von „Kaikôsha", dem allgemeinen Offiziercasino zu Tokio).

Die Wörter, die in diesem Buche enthalten sind, wurden zumeist von Fachmännern durchgesehen. In erster Linie habe ich zu nennen: Herrn Oberst Tôdjô, Abteilungschef des Grossen Generalstabs, für einen Teil der Ausdrücke auf dem Gebiete der Taktik und Strategie; Herrn Oberstleutnant Ôta, Lehrer an der Vereinigten Artillerie- und Ingenieur-Schule, für die Wörter der Ingenieurwissenschaft und Befestigung; sowie Herrn Oberrossarzt Dr. Kishimoto vom Kriegsministerium für die Ausdrücke der Veterinärwissenschaft. Ich kann diesen Herren nicht warm genug danken für die Liebenswürdigkeit, mit welcher sie sich dieser mühevollen Aufgabe unterzogen. In nicht geringerem Grade gilt mein Dank meinem Mitarbeiter Herrn Takata, der bei der Bearbeitung dieses Buches unermüdlich thätig war, und dem Herrn Tôgi, Herausgeber der „Zeitschrift für Deutsche Sprache," welcher mir hülfreich bei der Redaktion dieses Buches zur Seite stand, sowie dem Leiter der Druckerei „Kokubunsha," der seiner schwierigen Aufgabe gerecht wurde.

Mögen die Militärkreise, für welche dieses Buch bestimmt ist, letzteres

mit freundlicher Gesinnung aufnehmen und auch mit Nachsicht für die Mängel, die bei einem Werke, welches ein umgangreiches Gebiet in einen kleinen Rahmen fasst, wohl kaum zu vermeiden sind. Die Mitteilung entdeckter Fehler und Versehen werde ich als einen Ausdruck der Teilnahme an meinem Streben betrachten fernere Auflagen der Vollkommenheit entgegenzuführen.

Tokio, Oktober, 1899.

HARUKAZU FUJIYAMA.

小さな誤植が見うけられ，筆者の判断で訂正してその語に下線を施した。

日本語の序文をそのまま独訳している。参考文献を原語名で挙げているが，先に取り上げた『五國對照兵語字書』は扉に記されていた仏語名でなく，独自の独訳がなされている。欧語名のなかった『改正兵語辭書　獨和對譯之部　第一』『同　第二』についても同様である。

独文の序文で，戦術及び戦略用語に関して校閲を仰いだ専門家として最初に挙げられている Herr Oberst Todjo, Abteilungschef des Grossen Generalstabs（参謀本部課長　東條英教大佐[12]）は，何故か日本文の序文には見当たらない。

なお二版の序文については独文は添えられていない。

注

11）注3）参照

12）ドイツ留学の経験もある陸軍大学教官で，参謀本部編纂部長，メッケルの薫陶を受けた1人；後年の陸軍中将

2

先に『明治期の兵語辞書について（一）』で述べたように，明治新政府

の軍隊は，発足当時はフランス式を採用していたが，明治十年代になって次第にドイツ式に傾いて行く。フランス式からドイツ式への移行並びにメッケル少佐の来日と日本での活躍については，篠原　宏著『陸軍創設史　フランス軍事顧問団の影』（株式会社リブロポート　1983）に詳細な考察がなされている[13]。それによると，二度にわたるドイツ留学の体験から，兵制はフランス式よりもドイツ式のほうが我が国の国民性に合っていると考えた桂　太郎（当時参謀本部管西局長で大佐）は，明治17年軍制改革調査のための陸軍卿大山　巌ら15名の欧州派遣を契機に，大山を説得してドイツを巡視させた。一方，大山の外遊中，参謀本部長に再任された山縣有朋は，先にドイツ滞在中，偶々普仏戦争を体験して，プロイセン軍の優秀さを悟っていたので，陸軍卿になった西郷従道と謀り，在京のフランス公使館付武官ブーゴアン大尉 (Bougoin, A. E.) の強い抗議にもかかわらず，陸軍大学教官としてドイツ将校を雇い入れることを決めた。こうして明治18年3月18日，メッケル少佐が横浜に着いたのである。

メッケル ― Klemens Wilhelm Jakob Meckel (1842–1906) はコブレンツ生まれ，エリート士官としてのコースを歩み，普仏戦役で負傷後，プロイセン軍参謀本部付きとなり，その間に兵書の著述もあって，戦略家として名声を馳せていた。参謀総長モルトケ[14] の推薦によって日本へ派遣されたという。

来日したメッケルは陸軍大学で講義のほか，独自の参謀旅行を実施して実践的な戦術教育を行い，多くの軍関係者を魅了した。陸軍大学での教科書にもドイツのものが使用され，軍教育におけるドイツ語の需要も高まったのである。メッケルの契約は1年であったが，明治19年には契約延長のうえ，さらに参謀大尉ブランケンブルク (Hermann Leopold Ludwig von Blankenburg) も来日して，余力のできたメッケルは日本の軍制改革や歩兵操典の改正などに深く関与するようになった。結局メッケルは明治21年3月まで3年間滞在した。年俸は銀貨5400円であった。日本政府は日

露戦争後彼に勲一等瑞宝章を与えてその功労に酬いた。藤山が序文に書いているように，彼の後任として明治27年8月までに来日したドイツ人軍事教官は全部で4人で，フランス軍事顧問団の人数及びその滞在期間（慶應3年 ― 明治13年）に比べると，規模も小さいし，年数も少ないが，日本の陸軍をドイツ化に向けて建設した意味で，彼等の影響は大きいといえよう[15]。

藤山の序文には，著者自らの経歴も述べられているが，藤山治一については，熊本大学の上村直己教授の詳細な研究『ドイツ語学者　藤山治一の生涯と業績』及び『陸軍大学校ドイツ参謀将校の通訳官たち』に述べ尽くされている[16]。これによると，藤山治一は文久2年 (1862) 佐賀藩士の家に生まれ，明治11年駒場農学校（東京大学農学部の前身）の獣醫科に入学，明治13年旧佐賀藩主鍋島侯の給費生として選ばれてドイツへ留学，ベルリンとボンで農業経済学と動植物学を学んだ。帰朝後，東京外国語学校，独逸学協会学校，東京山林学校，東京大学予備門でドイツ語を教えていたが，明治20年3月陸軍教授に任命されて陸軍大学校教官として独逸語を教える傍ら，陸軍大学雇いのドイツ武官の通訳を務めることとなった。彼がドイツ人将校の講義や参謀旅行に同行して通訳官として勤めた次第は序文に明らかである。明治29年一旦職を辞して寺内正毅と再びドイツに渡航，兵制やドイツ語の教授法を学んで翌30年に帰国し，復職したが，明治37年陸軍大学校の一時閉鎖で大本営附きとなり，まもなく辞職した。その間に，藤山は明治35年から早稲田大学の嘱託講師となっていたが，明治43年から教授となり，早稲田大学ドイツ語科初代主任教授として活躍，早稲田独逸学会を再興した。その間，明治42年から大正5年まで，海軍経理学校教授嘱託となってドイツ語を教えた。大正6年4月急性腹膜炎のため急逝。本辞書の他，多数の独逸兵書の翻訳，ドイツ語教科書・学習書の著述がある。

共著の高田善次郎は，明治期の「独逸語界の三太郎」の一人として著名

な大村仁太郎の実弟で，藤山と同じように早稲田大学へも出講していた。序文が連名でないことから，藤山が主として編纂にあたったものと思われる。

注

13）同書　第十三章　分裂 — ドイツ化への道　398～447 頁

14）Helmut Graf von Moltke, 1800–1891. 近代的ドイツ軍の創設者。同名の甥で参謀総長になったモルトケと区別して大モルトケと呼ばれる。

15）メッケルの陸軍大学校における活動に付いては，先に注 1）で挙げた熊本大学の上村直巳教授の『陸軍大学校ドイツ参謀将校の通訳官たち』に詳述されている。

16）上村直巳著『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版　2001 年 3 月　第 5 章及び前注の文献

3

独文の序に続いて「ERKLÄRUNG DER IN DIESEM BUCHE GEBRAUCHTEN ABKÜRZUNGEN. 本書ニ使用セル畧語之解」が 1 頁ある。そこには次の 8 語が挙がっている。

adj. = Adjectiv　形容詞　*adv*. = Adverbium　副詞　*f*. = Femininum 女姓（名詞）　*int*. = Interjection　間投詞　*m*. = Masculinum　男姓（名詞）　*n*. = Neutrum　中姓（名詞）　*v*. = Verbum　動詞　*s*. = siehe 見ヨ

次から始まる本文は 1－436 頁で，第二版ではそれに加えて増補が 36 頁あって 472 頁で終わる。1 頁 30 行 1 段組みで，ほぼ 1 行に見出し 1 語とその訳語が収まっている。ただ，最初の頁のみ 21 行しかなく，A のタイトル分を差し引いても下欄に 5～6 行分空白部ができているが，理由はわからない。見出し語はラテン字体，ß は使用せず ss，頭字の大書は名詞

のみ，コンマのあとその品詞が，名詞はその性がイタリック体で示される。発音や，動詞の変化形，名詞の複数語尾等は表示されていない。また，不規則動詞変化表の付録もない。訳語は漢字と片仮名で横書き，読み難い漢字にはしばしば振り仮名が施されている。訳語の区分には読点（,）大きな区分には句点（。）を用い，訳語に（　）を使用して補足説明のあるものもある。用例や慣用句は1字下げて1行に1例ずつ，見出し語の反復は――で示してある。訳語が1行に収まらない場合はいわゆる折り曲げを用いている。137頁の例：（**図11**）

Fuchs, *m.*	栗毛（馬）
Fuchsschecke, *f.*	駁栗毛（馬）
fühlen, *v.*	感スル。觸レル
Fühlung, *f.*	接觸。接肘。連絡
―― nehmen	接肘スル
enge ――	密着接肘
leichte ――	輕疎接肘
mit dem Feinde ―― halten	敵軍トノ接觸ヲ維持スル
mit dem Feinde ―― nehmen	敵軍トノ接觸ヲ取ル
führen, *v.*	嚮導スル。指揮スル。
Führer, *m.*	長。指揮官。嚮導者。案内者。運轉手（機關車ノ）

兵語辞書としての特徴は，命令の語句の多さに表れている。例：

links, adv.

―― abmarschiert !	左向ケ進メ！
―― geschlossen !	左へ約メ！
―― um !	左向ケ左！
―― brecht ab !	左へ開ケ！
―― Front !	左向ケ！

—— richtet Euch！　　左へ準へ！

総見出し語数（用例，慣用句を含む）は本文約１万３千語，増補約１千語である。

訳語には，漢字による音訳法も，以下の例のように所々にまだ見受けられる。

Aluminium, *n*.	亞児密紐母
Brigg, *f*.	貌利屈船。兩桅船
Chloroform, *n*.	噶囉仿謨
Cholera, *f*.	虎列刺
Dynamit, *m*.	實那密陀
Fregatte, *f*.	弗列厦艦。三本桅ノ軍艦
Taifun, *m*.	大風
Diphtheria, *f*. Diphtheritis, *f*.	實扶的里亞　（二版）
Nickelstahl, *m*.	尼結爾鋼　（二版）

それらには片仮名を振ったものもある。例：

Blech, *n*.	延鈑。馬口鉄（ブリキ）
Kaponniere, *f*.	測防筐舍（カポニール）
Kosak, *m*.	胡索兵（コザノク）
Saffian, *n*.	麻羅歌革（モロノコ）

その一方で，片仮名による表記も採られている。例：

Binsenmatte, *f*.	「アンペラ」
Chassepotgewehr, *n*.	シヤスポー銃（佛國ノ）
galvanisch, *adj*.	「ガルバニ」電氣ノ
Genfer Konvention,	シユネーヴ條約（赤十字社ノ）
Kaiserjäger, *m*.	墺國「チロール」ノ獵兵
Mausergewehr, *n*.	「モーゼル」銃
Orientkrieg, *m*.	「クリメア」戰

因みに固有名詞は，第二版の増補に見られる次ぎの七つの地名のみで，地域が限定されていて，日清戦争の時局を反映している。

Formosa	臺灣
Hai-yang-tau	海洋島（黄海ノ）[17]
Pescadores	澎湖島
Pjöngyang	平壤
Port Arthur	旅順口
Söul	京城（朝鮮ノ）
Weihaiwei	威海衛[18]

補足説明には以下の例のような長文もある。

Militärkonvention, *f*.	陸軍契約（千八百六十七年ヨリ同七十二マデ普國ガ獨逸ノ南北諸國ト結ビタルモノ）
Revuegeschenk, n.	秋期大演習ノ際皇帝ヨリ下士卒ニ賜ハル慰勞金（下士ハ一「マーク」兵卒ハ五十「ペンニヒ」

見出し語には圧倒的に名詞が多い。上述の略語表からも窺えるように，冠詞，代名詞，前置詞，接続詞，数詞は皆無である。 形容詞も gut や schön，動詞も gehen, handeln, kommen, legen, lesen, schlafen, schreiben, trinken といったような基本語は見出し語にない。essen もなく，中性名詞としての Essen, *n*. 食事，食物 があり，副詞の hier も Hier！居リマス！（姓名ヲ呼ヒタル時ノ答辭）といった調子で，軍隊用語に徹している。複合語も一つの見出し語として扱い，例えば，Feld- の複合語は Feldadmimistration, *f*.[19] 野戰經理 から Feldzulage, *f*. 戰時增俸 まで 118 語が 120 頁から 124 頁まで，また，Kriegs- の複合語は Kriegsakademie, *f*. 陸軍大學校 から Kriegszustand, *m*. 戰備の状態。戒嚴 までの 113 語が 203 頁から 207 頁まで続いている。

熟語・慣用句の類も少数ながら収められている。例：

Pulver, *n*. 火薬　の用例に　er hat noch kein ―― gerochen　彼ハ未タ従軍シタルコトナシ

Uniform, *f*. 軍服。制服　の用例に　die ―― an den Haken hängen　軍隊ヲ離ル。兵務ヲ辞スル

注

17）黄海北方，大連東方に位置する現中国遼寧省の長山群島中の島

18）現中国山東省の海軍基地威海市。山東半島北東端に位置し，清朝末期は清国北洋艦隊の根拠地で，日清戦役で日本軍が攻略した。

19）Feldadministration の誤植

4

第二版の437頁から始まる「増補」には，冒頭に

×記號ヲ附シタルハ本書第一版ニ既ニ掲ケタルモノ、中譯語ノ不充分ナルヲ増補シタルモノ，該記號ナキハ本版ニ於テ新ニ加ヘタルモノ

との断り書きがある（**図12**）。例えば，A の部で×記號のある10語について，その第一版との訳語を比べてみると：

見出し語	第一版の訳語	第二版増補の部の訳語
Allerhöchat, *adj*.[20]	陛下ノ。至尊ノ	
――er Kriegsherr		大元帥
Amboss, *m*.	鐵碪	底碪。發火金
Anfang, *m*.	開始。發端。鈎部（塹壕ノ）。基址（穹窿ノ）	先頭（縦隊ノ）
Angriff, *m*.	攻撃	
umfassender ――		包圍攻撃
Anker, *m*.	錨	

Armeeabteilung, *f*.	軍事課	軍
Aufenthalt, *m*.	滞在。駐剳	停滞
Aufnahme, *f*.	収容。測圖。掌圖。測量	検査（砲ノ）
aufnehmen, *v*.	収容スル。圖ヲ測製スル。測量スル	検査スル（砲ヲ）
ausschiffen, *v*. (Waaren)	卸ス（貨物ヲ）。陸揚スル	下車セシムル
—— (Truppen)	上陸セシムル（軍隊ヲ）	

注

20）筆者の手元にある版では本文では Allerhöchst，増補部では Allerhöchat と誤植

5

初版の奥付は以下のように，左から右へ縦書きしてある（**図 13**）。

明治三十二年十一月廿二日印　刷　正價金一圓七十錢
仝　十一月三十日發　行　郵税十二錢
著作者　藤　山　治　一
東京府下豐多摩郡千駄ヶ谷村大字原縮百七十四番地
著作者　高　田　善　次　郎
東京市牛込區矢來町三番地
發行者　東　儀　季　治
東京市牛込區中町三十五番地
印刷者　武　廣　和　雄
東京市京橋區宗十郎町十五番地
發行所　獨　逸　語　學　雑　誌　社
東京市牛込區中町三十五番地

Fuchs, *m.*	栗毛(馬)
Fuchsschecke, *m.*	駁栗毛(馬)
fühlen, *v.*	感スル。觸レル
Fühlung, *f.*	接觸。接肘。連絡
—— nehmen	接肘スル
enge ——	密着接肘
leichte ——	輕疎接觸
mit dem Feinde —— halten	敵軍トノ接觸ヲ維持スル
mit dem Feinde —— nehmen	敵軍トノ接觸ヲ取ル
führen, *v.*	嚮導スル。指揮スル
Führer, *m.*	長。指揮官。嚮導者。案內者。運轉手(機關車ノ)
Fuhrkosten, *pl.*	運賃
Fuhrmann, *m.*	運送人。馭者。車夫
Fuhrpark, *m.*	彈藥及糧食運搬ノ車輛縱列。蒭秣車輛縱列
Fuhrparkskolonne, *f.*	同上
Führung, *f.*	指揮。裝塡。誘導(馬術語)
gute ——	善行。行狀方正
schlechte ——	行狀不正
Führungsattest, *n.*	善行證書
Führungswarzen, *pl.*	彈筍
Fuhrwerk, *n.*	車輛
Füllen, *n. s.* Fohlen.	
füllen, *v.*	滿タス。裝塡スル。孕マス(帆ヲ風ニ)
Füllerde, *f.*	除土
Füllkugel, *f.*	充實彈
Funktion, *f.*	職務
Furier, *m. s.* Fourier.	
Fürst, *m.*	國君。公

図 11

增　補

×記號ヲ附シタルハ本書第一版ニ既ニ揭ケタルモノヽ中譯語ノ不充分ナルヲ增補シタルモノ、該記號ナキハ本版ニ於テ新ニ加ヘタルモノ

A.

Abgangsexamen, *n.*	卒業試驗
Abteilungskommandeur, *m.*	部隊長。砲兵大隊長
Abtrift, *f.*	船ノ後退
Abzugsbügelboden, *m.*	彈倉底鈑
Abzugsfeder, *f.*	逆鉤發條
Abzugsflagge, *f.*	出帆旗
Abzugsgabel, *f.*	逆鉤軸栓
Abzugsstollen, *m.* / Abzugsstück, *n.*	逆鉤
abzweigen, *v.*	分遣スル。分岐スル
Abzweigung, *f.*	同上ノヿ
Accumulator, *m.*	畜電槽。揚重器
Aerostat, *m.*	輕氣球
agiren, *m.*	働作スル
aguerriren, *v.*	戰爭ニ慣ルヽ
Aktion, *f.* (beim Pferde)	肩及ヒ前脚ノ運動(馬ノ)
Alarmgeschütz, *n.*	警急號砲
Alarmpistole, *f.*	警急拳銃
Alignement, *n.*	直線照準。直線測量。整

図 12

印刷所　　國　文　社

東京市京橋區宗十郎町十五番地

第二版の奥付では，印刷・発行の日付が

明治三十二年十一月廿二日印　　刷　　正價金一圓七十錢

同　　十一月廿五日發　　行　　郵税十二錢

明治三十四年十二月廿四日再版發行

と，再版の印刷・発行日が1行書き加えられただけであるが，初版の発行日が十一月三十日から廿五日に変わっている。また印刷所が「合資會社東京國文社」となっている。

発行所の獨逸語学雑誌社は，明治31年10月から月刊雑誌『獨逸語學雑誌 (Zeitschrift für deutsche Sprache)』[21] を発行しているが，その第二年第二号（明治32年11月1日発行）に『獨和兵語辭書』の最初の広告が次ぎのように掲載された。

陸軍大學校教官陸軍教授　藤山治一

陸軍大學校教官陸軍教授　高田善次郎　合著

獨和兵語辭書　全一冊

正價金壹圓七拾錢●製本總クロース金字入四六版紙數四百五十頁●字數約一萬三千字

本書は戰術戰略語は勿論歩騎砲工に關する兵話，經理其他人馬衛生等の術語を網羅し又最も重要なる海軍術語をも収む殊に書中の校閲は各専門家其勞を取られたり本書の如きは蓋し斯界の良書なり

發行所　　獨逸語学雑誌社

そして第四号（明治32年12月1日発行）では，上掲の「全一冊」の下に「製本既成」の字が加わり，さらに第二年第七号（明治33年1月15日発行）では，「良書なり」のあとに「弊社は曩きに一千部を限り豫約を募集

陸軍大學校教官陸軍教授　藤山治一
陸軍大學校教官陸軍教授　高田善次郎　合著

獨和兵語辭書

全一冊

正價金壹圓七拾錢
郵税金十錢
總クロース背皮金字入
字數一萬三千有餘

本書は戰術語戰略語は勿論歩騎砲工に關する兵語、經理其人馬衛生等の術語を網羅し又最も重要なる海軍術語を收む殊に書中の校閲は各專門家其勞を取られたり本書の如きは蓋し斯界の良書なり弊社は曩きに一千部を限り豫約を募集せし處已に部數に充つるも尚申込者多數之あるを以て今般更に數千部を增刷し正價を以て高需に應せんとす請ふ續々購求あらんことを

發行所　京東市込區中町　獨逸語學雜誌社

図14

印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　國文社
發行所　東京市牛込區中町三十五番地　獨逸語學雜誌社
印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　武廣和雄
發行者　東京市牛込區中町三十五番地　東儀季治
著作者　東京市牛込區矢來町三番地　高田善次郎
著作者　東京府下豐多摩郡千駄ヶ谷村大字原宿百七十四番地　藤山治一

所有權著作

正價金一圓七十錢
郵税十二錢

仝　十一月三十日發行
明治三十二年十一月廿二日印刷

図13

せし處已に部數に充つるも尚申込者多數之あるを以て今般更に數千部を増刷し正價を以て高需に應せんとす請ふ續々購求あらんことを」が追加されている（**図14**）。そしてこの雑誌社の住所の誤記（京東市込區中町）されたままの広告が第八号，第九号にも掲載されているのであるが，ただ，予約募集の広告が見当たらない。また，もし部数の数字が文字通りであるとすれば，購買者は軍関係者だけにとどまらなかったと推察される。

『第二版』の予約に関しては，『獨逸語學雑誌』第四年第一号（明治34年9月20日発行）に1頁を割いた次の広告が掲載されている（**図15**）。

●第二回豫約募集廣告●

陸軍大學校教官陸軍教授　藤山治一

陸軍大學校教官陸軍教授　高田善次郎　合著

増補改訂 獨和兵語辭書　全一冊　正價金壹圓七拾錢　製本總クロース脊金字入　四六版紙數凡五百頁　字數約一萬六千字

本書ハ戰術戰略語ハ勿論，歩騎砲工ニ關スル兵語，經理，其他人馬，衛生等ノ術語ヲ網羅シ，又最モ重要ナル海軍術語ヲモ収メ之ニ的確ナル譯語ヲ施セリ，蓋シ海軍術語ノ和譯字彙ノ如キハ，本邦未ダ曾テ見ザル所ニシテ本書ハ實ニ之ガ嚆矢タリ，殊ニ書中ノ校閲ハ，各專門家其勞ヲ取ラレタリ，弊社曩ニ豫約法ニヨリ本書ヲ出版セシニ江湖ノ好評ヲ博シ其印刷部數ハ豫定ノ數倍ニ上リシニモ拘ハラズ未ダ二年ヲ出デスシテ之ヲ賣盡シタルハ弊社ノ極メテ幸榮トスル所ニシテ又以テ本書ガ如何ニ斯界ニ有用ナルカヲ知ル可シ仍テ左記第二回豫約法ニ因リ遺憾ナク諸君ノ厚脊ニ酬ントス殊ニ此際書中ニ改訂ヲ加ヘ又更ニ字數約三千ヲ増補セリ請フ續々御申込アランヿヲ

豫約方法

豫約部數　　壹千部限

豫約申込期限　　明治三十四年十一月三十日限○期限後ハ嚴ニ正價ニ

●第二回豫約募集廣告●

陸軍大學校教官陸軍教授藤山治一
陸軍大學校教官陸軍教授高田善次郎　合著

増補改訂 獨和兵語辭書

全一冊

正價金●壹●圓●七●拾●錢●
製本總クロース背金字入
四六版紙數凡五百頁
字數約一萬六千字

本書ハ戰術戰略語ハ勿論、步騎砲工ニ關スル兵語、經理、其他人馬、衛生等ノ術語ヲ網羅シ、又最モ重要ナル海軍術語ヲモ收メ之ニ的確ナル譯語ヲ施セリ、蓋シ海軍術語ノ和譯字彙ノ如キハ、本邦未ダ曾テ見ザル所ニシテ本書ハ實ニ之ガ嚆矢タリ、殊ニ書中ノ校閲ハ、各專門家其勞ヲ取ラレタリ、弊社曩ニ豫約法ニヨリ本書ヲ出版セシニ江湖ノ好評ヲ博シ其印刷部數ハ豫定ノ數倍ニ上リシニモ拘ハラズ未ダ二年ヲ出デスシテ之ヲ賣盡シタルハ弊社ノ極メテ幸榮トスル所ニシテ又以テ本書ガ如何ニ斯界ニ有用ナルカヲ知ル可シ仍テ左記第二回豫約法ニ因リ遺憾ナク諸君ノ厚呑ニ酬ントス殊ニ此際書中ニ改訂ヲ加ヘ又更ニ字數約三千ヲ增補セリ請フ續々御申込アランコヲ

豫約方法

豫約部數　壹千部限
豫約申込期限　明治三十四年十一月三十日限○期限後ハ嚴ニ正價ニ復ス
出來期限　明治三十四年十二月三十日（送本ハ着金順ニ依ル）
豫約金　壹●圓●貳●拾●錢●
爲替金拂込局　小包郵送料　十里迄五錢　百里迄八錢
牛込支局　百里外拾六錢　臺灣三十六錢
爲替受取人　東京市牛込區中町三十五番地獨逸語學雜誌社　帶封郵送料金十錢

見本御入用ノ方ハ郵券二錢送ラルベシ

豫約申込所　東京市牛込區中町三十五番地　獨逸語學雜誌社

図15

復ス

出來期限　明治三十四年十二月三十日（送本ハ着金順ニ依ル）

豫約金　壹圓貳拾錢郵送料金拾貳錢

小包郵送料　十里迄五　錢　百里迄八錢

百里外拾六錢　臺灣三十六錢

為替金拂込局　牛込支局

為替受取人　東京市牛込區中町三十五番地　獨逸語學雜誌社

帶封郵送料金十錢

見本御入用ノ方ハ郵券二錢送ラルベシ

豫約申込所　東京市牛込區中町三十五番地 獨逸語學雜誌社

『第一版』の予約募集もこれとほぼ同様であったと推測される。

注

21）明治31年10月15日創刊のドイツ語月刊雑誌で，学習院教授大村仁太郎らによって発行され，昭和初期まで続刊された。初年度（明治31年10月から明治32年8月）は毎月1回15日発行であったが，明治32年9月15日発行予定の第12号を休刊として第2年度（明治32年10月）から毎月2回1日と15日発行となり，第3年度の第5号（明治34年1月）より再び毎月1回20日発行，第5年度（明治35年10月）以降は毎月1回1日発行となった。この雑誌については熊本大学上村直己教授の『日本におけるドイツ語雑誌の歴史（2)』（熊本大学教養部紀要　外国語・外国文学編　第22号1987　93～118頁）に詳述されている。